

仁淀病院 院長 松浦 喜美夫

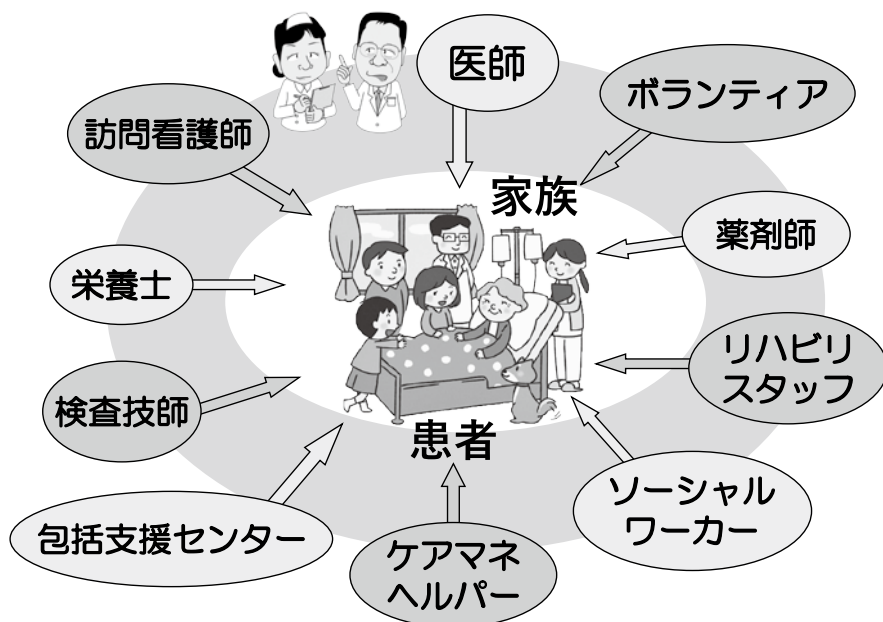
日本人の平均寿命は年々伸びており世界でもトップクラスですが、同時にがんに罹る人も年々伸びており100万人を超えました。がんは日本人の死因で最も多い病気で、3人に1人ががんで亡くなっています。このように身近な病気になったがんですが、多くの患者さんは、がん自体の症状のほかに、痛み、倦怠感などのさまざまな身体的な症状や、落ち込み、悲しみなどの精神的な苦痛を感じています。「緩和ケア」は、このようながんの身体的・精神的な苦痛をやわらげるためのケアで、がんが進行した時期だけでなく、がんが見つかったときから必要に応じて行われます。

がんと診断されたときには、気分が落ち込み、悲しみや不安で眠れないこともあります。また治療の間には副作用などで、吐き気や、食欲がなくなったり、痛みが強くなったりなど様々な苦痛を伴うこともあります。「つらさをやわらげる」という緩和ケアの考え方を、診断されて間もない時期から取り入れることで、こうしたつらい症状を緩和しながら日々の生活を送ることができます。

がんに対しての治療が難しくなっても、何もできなくなったということではなく、緩和ケアを行うことにより、患者さんの痛みや食欲不振、倦怠感、気分の落ち込み、孤独感などを軽減することができます。自分らしさを保つことや、生活スタイルの確保など、緩和ケアではそれぞれの患者さんの生活が保たれるように、医学的な側面に限らず、心のつらさあるいは介護の利用、療養生活の経済的な問題などに対しても幅広く対応し、「自分らしく生きること」を支援します。

これらの種々の悩みに対して、医師と協力して看護師やメディカルソーシャルワーカー、薬剤師、栄養士、リハビリテーションスタッフ、ボランティアなどが緩和ケアチームを組んで支援します。地域医療連携室やスタッフにいつでも気軽にご相談ください。

緩和ケアにおけるチーム医療 (医療介護の連携ネットワーク)



【在宅での緩和ケア】

療養場所として住み慣れた自宅を選択することも、また慣れ親しんだ地域の介護施設などで緩和ケアを受けることもできます。在宅緩和ケアを行う医師や訪問看護師、薬剤師などによる在宅での治療を受けながら、介護保険も利用してヘルパーなどの介護を受けながら自宅で療養を続け、最期まで安心して自宅で過ごし看取りをすることもできます。「家に帰りたい」「慣れ親しんだ家で、地元で過ごしたい」という思いがあれば、医療職と介護職が連携協働し在宅支援チームを組んで、患者さんとお家族をサポートします。